光明寺だより

第102号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030　西条市大町550
TEL 0897-53-4583

心に残る詩

いのちのバトンタッチ

人は必ず死ぬのだから
いのちのバトンタッチがあるのです

死に臨んで先に往く人が
「ありがとう」と云えば
残る人が
「ありがとう」と応える
そんなバトンタッチがあるのです

死から目をそむけている人は
見そこなうかもしれませんが
目と目で交わす一瞬の
いのちのバトンタッチがあるのです

新春特別法座

１月９日（木）

★おつとめ　午後３時半

★おはなし　午後４時

【講師】備後教区・光徳寺前住

藤田徹文先生

★「新春特別法座」は本年を以て終了いたします

浄土真宗の宗風・・現世祈祷や、まじないを行わず、占いなどの迷信にたよらない

一口法話

愚かさを知る

『宇治拾遺物語』に次のようなお話があります。

京都の愛宕山に、長年仏道修行を続けている聖が住んでいました。ひたすら修行に明け暮れ、ほとんど庵を出ることがありません。近くに住む猟師は、そんな聖をことのほか尊敬し、たびたび庵を訪れては食べ物など差し入れていました。

ある時、久しぶりに食料をかごに詰め込んで聖の住まいを訪れると、

「おぉ、よく訪ねてくれた。しばらく見ないからどうしておるのかと気がかりじゃった。まぁ元気そうで何よりじゃ」

と、聖は大変喜び、久しぶりの再会に話が弾みました。

そのうち聖は、最近体験した不思議な出来事を猟師に話し出すのです。

「実はな、最近たいそう尊いことが起きるのじゃ。というのはな、このところ毎晩、普賢菩薩様が白い象に乗ってこの庵にやってこられるのじゃ。まぁこれも長年の修行によるもんだろうかなぁ。きっと今晩もお出ましになられると思う。お前さんには信じがたいことだろうが、今晩ここに泊まって一緒に拝んでみたらどうじゃ」

聖の誘いに猟師は一晩泊まることにしました。

夜のとばりも下り始めた頃、いつものように聖の読経が始まりました。

その背後で猟師は、今か今かと普賢菩薩の出てくるのを待っています。

夜半過ぎかという頃です、東の山の峰をすさまじい風が吹き渡り、暗闇の中から、五色の光が射したかと思うと、白い象に乗った普賢菩薩がしずしずと空中から舞い降り、庵の前にお立ちになり、じっとそのお経を聞いているではありませんか。

聖は感動の涙を流しながら、なおも一心不乱に読経を続けます。

その時です。

聖の背後でこの不思議な光景を眺めていた猟師が、何を思ったか、持っていた弓に矢をつがえ、普賢菩薩めがけて思いっきり矢を放ったのです。

その瞬間、「ギャー」という叫び声と共に、普賢菩薩の姿はかき消え、一瞬にして元の暗黒の世界に戻ったのです。

何事が起こったのか、しばらく呆然としていた聖は、それが猟師の仕業であることに気づくと、烈火のごとく怒ったのです。

「お前はなんという恐ろしい奴じゃ。こともあろうに普賢菩薩様に向かって弓を引くとは、何と罰当たりな事をしてくれたもんじゃ。愚か者めが」

と激しくののしったのです。

聖のあまりの剣幕に、しばらく押し黙っていた猟師でしたが、おもむろに顔を上げ、申し訳なさそうに、

「お上人さま、あれは菩薩さまでも何でもありません。ただの妖怪でございます」

と、答えたのです。

「馬鹿なことを申すな。何を証拠にそのようなことを申すのじゃ」

「いいえ、確かに妖怪でございます」

「まだ血迷うたことを言うか」

「いいえ、妖怪に間違いありません」

二人の間で、このような押し問答が続

けられたのですが、お互いの言い分は収まらず、翌朝あらためて、事の真相を確かめることにしました。

夜の明けるのを待ちかねて、二人が庭先に降りて見ると、昨夜は暗闇で何も見えなかった草むらに、大量の血痕がついているのを見つけるのです。

何者かが傷を負いながら逃げたのでしょう。点々と血の痕が続いているのです。

その痕をたどっていくと、何と谷底に年老いたタヌキが、とがり矢で射抜かれて死んでいるのが見つかったのです。胸を射抜いたその矢は、紛れもなく昨夜放った猟師のものです。

これを見た聖は大いに恥じ入り、そして猟師に言ったのです。

「何と恥ずかしいことを・・・・だまされていることに気づかずに。それなのに、お前は一目見て妖怪だと見抜いた。なぜわかったのか教えてくれぬか。」

猟師は答えました。

「お上人さま、あなた様のように修行の出来たお方の目で菩薩さまが拝めるというのなら話はわかります。でも、私のような愚かな者に菩薩さまが見えるはずはございません。ところが、昨夜この私にでも菩薩さまを見ることが出来たのです。見えるはずのないものが見える。とすればこれは間違いなく妖怪だと思ったのです。もし妖怪ではなく本物の菩薩さまでしたら、私のような者の矢は簡単にかわせるはずです。だから矢を放ったのです」

これを聞いた聖は、その猟師の冷静な洞察力に感心し、自らを深く恥じ、それからはこれまで以上に仏道修行に精進したということです。

最後に語った猟師の言葉には、まことに味わい深いものがあります。

猟師は自分は愚かな人間であることを知っていました。

「私のような愚かな者に仏さまが見えるはずがない」と、自分を知っていました。だからタヌキはだましようがなかったのです。

愚かであることと、愚かを知るという事はまったく違うのです。

ところが聖は長年の修行が仇になって、「これくらい修行が出来たら、菩薩が見えても当然だ」と自惚れ上がっていたのです。

それが慢心（自惚れ、思い上がり）だということに、聖は気づかなかったのです。愚かでありながら愚かだと気づかない。それどころか賢いとさえ思っている。その心（慢心）にタヌキはつけこんだのです。

聖はタヌキにだまされたのではありますが、実は自分自身にだまされていたと言えるでしょう。

自惚れの心をもったその時から、求める道は閉ざされます。仰ぐ心を失ったその時から、み教えは耳に入りません。

これは、仏法を学ぶ上で、最も心しなければならない戒めです。

恐るべきはまさに「慢心」であります。

★テレフォン法話「第1集・第5話」より

秋の『彼岸会法座』開催！

9 月 27 日（金）午後 2 時より、備後教区・法光寺住職・季平博昭先生をお招きして秋の彼岸会法座を開催いたしました。今回は先生ご自身が月刊誌『大乗』に執筆された本願寺の連続研修会のテーマの一つ「自他ともに心豊かに生きるとはどのようなことでしょうか」について、多くの事例を挙げながら大変わかりやすくお話していただきました。１８名のご参拝者がありました。

【講演主旨】

私たちの教団は、阿弥陀さまの願いをよりどころとしてお念仏申す人々の集う「同朋教団」であり、また阿弥陀さまの智慧と慈悲を伝える「伝道教団」であります。
阿弥陀さまの智慧のハタラキを頂くことによって私の本当の姿（煩悩具足の凡夫）に目覚めます。目覚めれば「何とかしたいなー」という思いが生まれます。
また、苦しみや悲しみ共にして下さる阿弥陀さまのお慈悲のハタラキを頂くことによって、心にあたたかい温もり感じます。
そうやって阿弥陀さまの温もりに包まれた一人一人が、お互いに信頼し合い、支えあって生きていける関係を築いていくことが「自他ともに心豊かに生きる」ということだと思います。

一無言の行一

さる山寺に、四人の上人が集まって無言の行をしました。
７日間の無言の行をして、誰が一番勝つか競争してみようという訳です。
やがて第一夜も更けてきて、灯火が今にも消えそうになったのを見た第一の上人、思わず「火をかきあげぬと消えるぞ」と口を滑らしてしまったのです。
これでまず一人が失格です。ところがこれを聞いた第二の上人、「無言道場でものを言うてはだめじゃないか」となじったのです。これで第二の上人も失格。
すると第三の上人、すかさず「二人ともこれで失格じゃ」としゃべったのです。
これでまた一人失格です。
さて、先ほどから事の成り行きをじっと眺めていた最後に残った上人、にっこりうなずき、「さてもさても、これで無言なのは、あとワシ一人だけじゃ」と言ったというのです。　　『沙石集』より
斯くの如く、私たちは執着したものにとらわれるのです。

『報恩講』

好天に恵まれた 11 月 13 日（水）午後 2 時より、西条組内の長敬寺住職・塩崎隆徳師をお招きして報恩講が勤まりました。
ご法話は、親鸞聖人の『さるべき業縁のもよおさばいかなるふるまいすべし（我々人間は縁次第で何をしでかすかもわからない)』（歎異抄）というお言葉を通してお念仏の教えの深い道理をお話し頂きました。
世間では二律背反するものは同時に成立しませんが、お念仏のみ教えでは、救われるはずのないこの私（罪悪深重の凡夫）と、そのままで救われる（念仏の行者）という二律背反するものが同時に成立しているのです。そこにお念仏のみ教えの有難さがあり、深い道理があるのです。なお本年度の法座皆勤者は次の７名方でした。
永井初江・松本朱美・真鍋磨千子・森延子・森本仁・安永省一・安永敏枝（敬称略）

法座皆勤者の皆さん

長敬寺ご住職の講演

令和２年行事予定表

日　時	行事名	講　師
１月０９日（木）午後４時	新春特別法座	備後教区光徳寺前住・藤田徹文師
１月１６日（木）	正月参拝	
３月１５日（日）午前９時	涅槃会	
３月１９日（木）午後２時	彼岸会法座	大阪教区法栄寺前住・小林顯英師
８月１３日（木）１４日（金）	新盆合同追悼法要	
８月１６日（日）	お盆参拝	
９月29日（火）午後２時	彼岸会法座	備後教区法光寺住職・季平博昭師
12月上旬予定	報恩講	未定
１２月３１日（木）	除夜会・元旦会	

★行事の追加、変更等がありましたら本紙にてお知らせします。

趣味の広場

俳句を楽しむ（八十一）

森本隆を

今年は夏から秋にかけて台風による風水害の多い年でした。昔と違って近頃の台風は東日本を襲うことが多く、関東や東北の皆さんが大いに迷惑した様子です。水害も大きい川というより中小の川が溢(あふ)れることが多かったようで、やはり国の政治の基本は治山治水にあることを思い知らされました。といっても、大自然に力で立ち向かうというのではなく、自然に寄り添い、時にはその威力をなだめて、大自然の中で生かされるような生き方が正しいのではないかと思いました。さて、今年は季節の食材をテーマにした俳句を鑑賞していますが、今回はその最後で「秋」の句です。

新米の詰まりて叺立(かます)にけり　広田　丘映

てのひらにいくたび掬(すく)ひ今年米　渡辺立男

資源の乏しい我が日本は古来、農業国として成り立ってきていて、そのおおもとは米作りですね。神事や生活習慣、年中行事と我々の暮しの全般にわたって米作りとのかかわりで成り立っていると言っても良いくらいです。秋の収穫期は、米の作柄出来高で話は持ち切りだったと思います。この二句も新米を前に秋の喜びいっぱいの句ですね。

新蕎麦を打つまで酒で待てといふ　野村英一郎

吊し柿朝一番の日が当る　茂里　正治

それぞれの家それぞれの柿の色　下村直子

猿よりも早く起きねば栗拾ふ　平松　三平

すこし秋の楽しそうな句、面白い句を四句ひろってみました。新蕎麦の季節、新ソバの味も楽しみだがその前の酒も楽しみな人、渋柿の皮を剥いで軒先に吊るして甘い干柿を作る楽しみ、栗畑の栗が実る頃には山からの猿に荒らされる心配でつい早起きして栗拾いに行く人、人それぞれに秋の日々の過ごし方があり、その心情をわかり易く詠んでいます。柿といえば、かつての日本の農村では、各家に色々な季節の果物の木を植えていました。ミカン、グミ、イチジク、キンカン、そして柿、などです。何年か前、信州へ旅行した時、あちらでは家の庭先にリンゴの木が一、二本あり、赤いリンゴが鈴なりになっていました。農村といえば、

いろいろな物干すなかの新小豆　金丸鉄蕉

という句が目につきました。かつては農村のお年寄りは一日中、庭先や縁側で背を丸めて何か仕事をしていました。大根を干す、柿の皮をむいて干柿作り、収穫した芋類の保存、そして大豆や小豆を干して保存する、など全てお年寄りの仕事でしたね。

秋刀魚焼く備長炭(びんちょうたん)はぜい沢な　筋師らしく

サンマというより炭の話題になりますが、現在では、備長炭とまで言わず炭そのものがまるでぜいたく品のような品物になりました、私が子供の頃は冬の暖をとると言えば火鉢の炭火であり、掘りゴタツの炭火でした。いつの頃からか、ガスと電気の前に、あっという間に私達の暮しの中から炭が消えました。

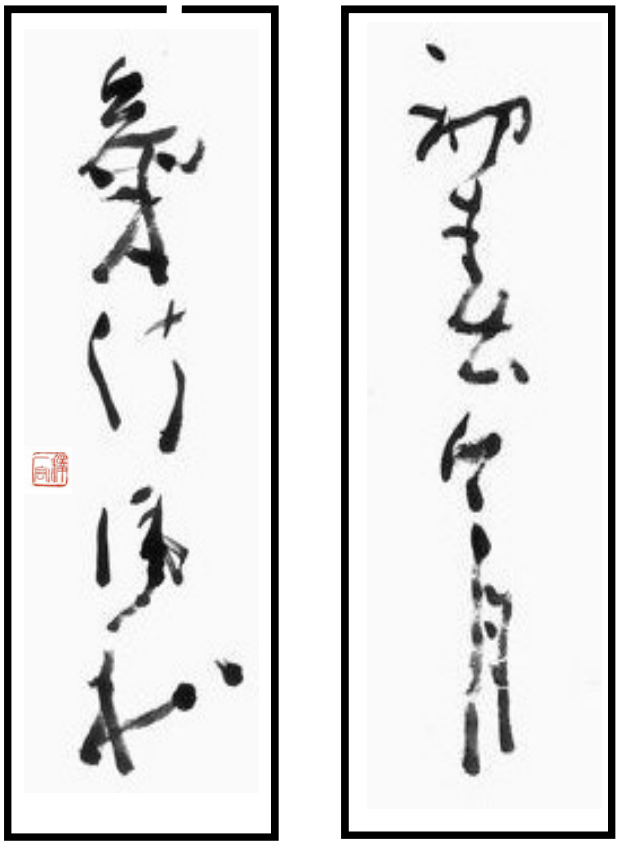
最後に

養生訓(ようじょうくん)棚上げにして新走り　林田　江美

ぬくめ酒養生訓といふ伴侶　尾崎　義之

「養生訓」は江戸時代の養生の本です。「新走り」は新酒（秋の季語）です。「ぬくめ酒」は秋になり少し寒くなった頃、ぬるめの燗(かん)酒にして飲む酒です。前の句は養生の話など後に置いておきまずは新酒の話を、という句。あとの句は、ぬくめ酒の季節がきたが、体のことも考えつつ酒を楽しもう、という句。酒好きな人の微妙な心のあり方をうまく詠んだ二句ですね。いずれにせよ、秋の夜長、冬の寒い夜、お酒は百薬の長ですが、まずはほどほどに。よいお年をお迎え下さい。

住職書作品



【字句】初春の令月にして　気淑（よ）く風和らぐ

万葉集「巻五梅花の歌」の一節

元号「令和」の出典

BOOK　本

『一味』

発行所　一味出版部
　　行信教校
定　価　２００円（税込）

大阪高槻市に行信教校という宗門の教学を学ぶ学校があります。そこの出版部から『一味』と題した季刊誌が年４回発行されています。

本書の巻頭にはいつも、故・梯實圓和上（当学園の名誉校長・本願寺派勧学）のご法話が載せられておりますが、語り口調の文章で書かれてあるため、まるで法座の席で聴かせてもらっているようで大変ありがたく感じます。今回は「他力」と題したご法話でした。

また本号では、偶々（たまたま）、今年10月、光明寺に団体参拝に来られたお寺（広島市安芸郡・龍泉寺）のご住職武田一真さんの法話が寄稿されており、本号がより身近に感じられたことでした。なお現在の学園の校長先生は、光明寺にご講師としてよくお越し頂いてました天岸淨圓先生です。

光明寺のホームページ

南岳山光明寺　検索

言葉のプレゼント

いのちって
大切な人から託されたバトンなんです
すべての人が
託されたいのちを生きているのです

鈴木中人

「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読みください

★次回発行予定…2月中旬

令和２年度年忌早見表

該当家に年忌通知表をお配りしていますが、念のため早見表を参考にご自宅の過去帳でご確認ください

回忌	死亡の年号
1周忌	平成31年 令和1年
3回忌	平成30年
7回忌	平成26年
13回忌	平成20年
17回忌	平成16年
25回忌	平成　8年
33回忌	昭和63年
50回忌	昭和46年
66回忌	昭和30年
100回忌	大正10年
150回忌	明治　4年
200回忌	文政　4年
250回忌	明和　8年
300回忌	享保　6年

話題

★９月27日（金）午後２時、秋季彼岸会法座を季平博昭先生をお招きして開催いたしました。18名の参拝がありました。（＊関連記事５ページ）

★11月13日（水）午後２時、報恩講が営まれました。講師は塩崎隆徳師（西条組・長敬寺住職）でした。20名の参拝者がありました。

（★関連記事６ページ）

★㈱ソラヤマいしづち発行のチラシ（るるぶ編集）に光明寺のことが紹介されています。

★このたび愛媛県で戦後の名建築発掘紹介事業が立ち上げられ、光明寺もその対象になっています。

★新春法座は今回を以て終わります。

★住職の長男（光（ひかる））がよく歩き、よく部屋に遊びに来ます。